

効果的かつ効率的な

能動的学修カリキュラムを求めて

～佐賀大学PBL・TBL運営 15年の経験～

佐賀大学医学部 教授

地域医療科学教育研究センター長



講師：小田 康友 先生

日 時：平成28年8月4日 (木) 10:30～12:00

会 場：C4 1 講義室 (中央講義棟 4F)

事前の申込みは不要です。当日は、直接会場におこしてください。

能動的学修は、H24年中教審答申で、大学教育の質的転換を図る切り札として位置づけられています。問題基盤型学習 (PBL) やチーム基盤型学習 (TBL) は、能動的学修を代表する教育方略ですが、佐賀大学医学部では、2001年より3～4年次カリキュラムにハワイ大学式PBLを55症例導入しました。ハワイ大学式PBLは、1症例あたり1週間の期間を要するため、PBL導入に際しては、臨床医学の講義数を従来の約半分まで削減して時間を確保しました。

当初、ハワイ大学式PBLの忠実な導入によって、学生の学習を問題志向の自己学習に転換できると考えましたが、期待に反し、それは間もなく形骸化しました。学習の効果・効率、運営リソースなどの問題点を抽出し、その欠点を補う形で、2008年よりPBLの半数をDUKE-NUS方式TBLに転換したところ、学習効果と教育効率の向上が見られました。このPBL/TBLハイブリット方式を軸とする教育は、「実践的臨床医養成への問題基盤型学習の実質化」として、2008～2010年文部科学省GP (特色ある大学教育プログラム) に採択され、高い評価を受けました。

教育方略を活かすためには、講義や実習、試験のあり方、教員の姿勢を含めたカリキュラム全体の設計を一貫したものにし、学生の学力や学習習慣、施設のマンパワーに即した運営が不可欠です。本セッションでは、教育改善の一助としていただくために、佐賀大学がそれに学んだ経験を紹介します。